様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：１７４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３７２０１６７

研究課題名（和文）ドイツ＝ポーランド国境地帯の文学と移民文学の比較研究－記憶と「〈わたし〉語り」

研究課題名（英文）A Comparative Study of the Polish Literature in the Polish-German Borderlands and the Polish Migrant Literature in Germany

研究代表者
井上　暁子（Inoue, Satoko）

熊本大学・文学部・准教授

研究者番号：２０５９９４６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：旧ドイツ領にあたるポーランド北部／西部国境地帯が、1980年代以降に書かれたドイツ語・ポーランド語文学においてどのように表象されるかという問題を、とくにその独特な「わたし語り」による記憶の描かれ方に注目して分析した。当該国境地帯は、この地域在住のポーランド語作家の文学においては多層的な記憶のテクストとして表象されているが、社会主義末期西ドイツへ移住し、体制転換後両国を行き来する作家の文学においては、国境地帯をめぐる様々なディスクールが移動者の視点から脱構築される。さらに、体制転換に伴う創作環境・流通形態の変化と、題材・テーマ・手法への影響に関して、10名の作家にインタビューを行った。

研究成果の概要（英文）：This study was intended to examine how the northern and western Poland are depicted in literary works by the writers born in the Polish-German borderland in the late 1950s and the 1960s who later partly migrated to West Germany in the 1980s, focusing on first-person narratives in which the totalizing state-driven cultural vision and historical view are deconstructed from the perspective of the borderland. These Polish literary works, written in the second half of the 1980s to the 1990s, represent this borderlands region as a multilayered palimpsest in which multiple histories, cultures, and memories are inscribed atop one another. In this way, the writers considered here deconstruct totalizing border discourses. In addition, interviews with ten writers were held to provide the core of an oral archive containing discussion of the changed writing environment and opportunities for wider circulation after 1989 and their influences on the subject matters, themes, and narrative techniques.

研究分野：ドイツ語圏を含む中・東欧文学

キーワード：ポーランド:ドイツ　中・東欧文学　国境地帯　移動　国際研究者交流　国際情報交換　作家インタビュー　流通

１．研究開始当初の背景
国境線が幾度も引き直され、民族・文化・言語の混成化が進んだポーランド／ドイツ国境地帯のうち、とくに現ポーランド領に属する地域（ポーランド北部／西部国境地帯）は、これまで「ドイツ語文学」の枠組みか、そうでなければ、第二次世界大戦後当該地域に生まれた作家による「ポーランド語文学」の枠組みの中で論じられてきた。この地に生まれたが、社会主義末期ポーランドから西ドイツへ移住した人々の文学は、ポーランド語文学の枠組みの中で「（伝統的な亡命文学とは異なる）移民文学」という特殊なジャンルを形成するにとどまった。
　また、当該国境地帯における移住や移動形態の変化というテーマは、地域史や社会学の分野で扱われ、文学作品の流通や社会文化状況が文学に与えた影響については十分考慮されてこなかった。そこで本研究では、1980 年代後半から 90 年代にかけて当該国境地帯で書かれたポーランド語文学と、1980 年代後半から 2000 年代初頭にかけてドイツで書かれた当該地域出身作家によるドイツ語ないしポーランド語文学を取り上げ、それぞれの成立・発展の経緯、歴史的文化的状況、語りの特徴を比較分析することをめざした。

２．研究の目的
本研究の目的は、ポーランド北部／西部国境地帯の複雑性が、1950 年代末から 60 年代この地域に生まれた作家の文学においてどう表象されるかという問題を、とくに、当該国境地帯で書かれる文学の独特な「わたし語り」に注目して分析することであった。比較対象としたのは、1980 年代後半から 90 年代にかけて当該国境地帯で書かれるポーランド語文学と、1980 年代後半当該地域から西ドイツへ移住し、体制転換後もドイツにとどまりドイツ語ないしポーランド語で創作する人々の文学であった。
　この目的をかなえるため、（１）社会主義体制崩壊に伴う社会及び創作環境の変化を明らかにすることと、（２）（１）が文学に及ぼした影響を、とくに、作品の題材、テーマ、語りの手法に注目して明らかにすることという、二つの目標を掲げた。

３．研究の方法
本研究の対象の一部をなす作家集団は、1980 年代西ドイツへ移住しているが、彼らの移住は、19 世紀以来この地域に存在する東から西への移住の延長線上にあり、亡命文学研究においてはほとんど扱われてこなかった。また、彼らが属する 1950 年代から 60 年代生まれの世代は、第二次世界大戦後の国境線の移動により、旧ポーランド東部領より強制的に移住させられた人々の次世代にあたり、成長過程で自身の故郷に異文化の痕跡を発見するという共通体験をもっている。また、彼らは、思考形態や政治的立場の点で前世代と異なり、たとえばポーランドで戒厳令が布告された 1981 年、「敵か味方か」「集団か個人か」「体制派か反体制派か」といた二項対立を嫌い、体制出版でも反体制出版でもない、第三の流通経路を確立して、世界の文化を積極的に取り入れた。その影響は、体制転換後この世代が牽引した文化潮流にもはっきりと表れている。
　こうした理由から、本研究では（１）ドイツ／ポーランドにまたがる地域に固有の歴史性、（２）1981 年の戒厳令から、体制転換、ポーランドが欧州連合に加盟した 2004 年に至るまで、という時代性、（３）文芸批評から見たポーランド語圏／ドイツ語圏における受容、という三つの観点を手がかりに、創作環境、作品の流通状況の変化、作家の戦略、受容の傾向について分析した。先行研究から得ることが困難な情報に関しては、作家に直接インタビューし、オーラルアーカイブのデータとして収集した。

４．研究成果
本研究の成果は以下の 3 点である。（１）1980 年代末から 90 年代にかけてポーランド北部／西部国境地帯では、社会主義時代には公的言説から排除されてきた記憶を掘り起こす文化運動が起こっており、当時書かれたポーランド語文学作品の「わたし語り」にその影響がみられる。具体例としては、当該地域に残された歴史的事件の記憶や私的な物語を、多層的な語りのテクスト（再録羊皮紙）として編み上げる、という特徴である。この点については、2012 年拙稿「想起される地域—現代ポーランド文学における国境地帯の表象」で、パヴェウ・ヒュレの代表作『ヴァイゼル・ダヴィデク』を例に論じた。
（２）社会主義末期西ドイツへ移住した作家は、体制転換後両国を行き来するようになり、出身地域の出版社や文化人サークルとも協力関係をもったが、その文学作品には、しばしば「場所と有機的につながりもたず、場所の記憶を共有するべき相手をもたない存在」が語り手として登場し、ヨーロッパ、国家、地域、民族的文化的アイデンティティをめぐる様々なディスクールの裏をかき、それらを自己定義や表現に利用したり、脱臼させたりしている。この特徴については、博士論文「語りの断層：ドイツ連邦共和国におけるポーランド人作家の現代文学　Dislocated Narratives—Contemporary Polish Literature in the Federal Republic of Germany」（2013 年度東京大学大学院総合文化研究科にて博士号取得）で論じた。
（３）体制転換に伴う創作環境や流通状況の変化に関しては、10 名の作家にインタビューを行い、オーラルアーカイブの基盤を構築した。
　これらの研究成果は、すでに国際学会や国内外のセミナーで報告しており、海外の研究者との学術交流が進んでいる。また、オーラ

ルアーカイブに関しては、国内の中・東欧文学研究者と協力して、より大きな規模に発展させることが決まり、現在 HP 開設の準備中である。これまでに収集したデータは、今後そこに順次アップロードされる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
（１）【論文・査読無】Satoko Inoue, "Introduction to the essay: *Ten months and two Days*"（スラブ・ユーラシア研究センターの欧文論集として刊行準備中）
（２）【論文・査読無】Satoko Inoue,"Imagination of Space and Places in Polish Travel Writing after 1989. Natasza Goerke's "Before the Storm"",（同上）
（３）【論文・査読無】井上暁子「亡命と移住の文学:ポーランドの作家たち」、岩下明裕・木山克彦編著、『図説ユーラシアと日本の国境　ボーダー・ミュージアム』（北海道大学出版会）、2014 年、64-67 頁
（４）【論文・査読無】井上暁子、「1980 年以降のポーランド語文学におけるドイツ／ポーランド国境地帯の表象—移動作家の視点から」、『日本ロシア文学会関東支部報』、32 巻、2014 年、33-36 頁

〔学会発表〕（計１２件）
（１）発表者名：Satoko Inoue, 発表標題："Imagination of Space and Places in Polish Travel Writing after 1989", 学会名等：Images of Eastern European Literature. The Variable and Invariable in the Past and Present, 発表年月日：2014 年 9 月 28 日, 発表場所：立教大学（東京都・豊島区）
（２）発表者名：井上暁子、発表標題：「移住を背景にもつ作家と世界文学の対話——ドイツ／ポーランド国境地帯で書かれる文学を通して—」、学会名等：世界文学語圏横断ネットワーク第一回研究会、発表年月日：2014 年 9 月 23 日、発表場所：立命館大学（京都府・京都市）
（３）発表者名：井上暁子、発表標題：「1980 年以降のポーランド語文学におけるドイツ／ポーランド国境地帯の表象—移動作家の視点から」、学会名等：日本ロシア文学会関東支部春季研究発表会、発表年月日：2014 年 6 月 7 日、発表場所：さいたま大学（埼玉県・さいたま市）
（４）発表者名：Satoko Inoue, 発表標題："Nationale, regionale und individuelle Erinnerungen im Spiegel der Literatur polnischer Autoren in Deutschland", 学会名：Klaus Zernack Colloquiums, 発表年月日：2014 年 3 月 17 日, 発表場所：ポーランド学術アカデミーベルリン歴史研究所（ドイツ・ベルリン）
（５）発表者名：Satoko Inoue, 発表題目："Literatur an der Grenze. Literarisches Schaffen von Schriftstellern polnischer Herkunft in Deutschland", 学会名等：Deutsch-Polnische Sommerakademie 2013, 発表年月日：2013 年 9 月 6 日, 発表場所：ドイツ／ポーランド・インスティテュート（ドイツ・ダルムシュタット）
（６）発表者名：Satoko Inoue, 発表題目："Strategies for crossing borders: the case of Klub Polskich Nieudaczników (Club of Polish Underdogs) in Berlin", 学会名等：Association for Borderlands Studies, 発表年月日：2013 年 4 月 12 日, 発表場所：アメリカ・デンバー
（７）発表者名：Satoko Inoue, 発表題目："Strategies for crossing borders: the case of Klub Polskich Nieudaczników (Club of Polish Underdogs) in Berlin", 学会名等：日本学術振興会助成平成 24 年度国際研究集会「グローバル化時代の世界文学と日本文学——新たなカノンを求めて」（東京大学文学部現代文芸論研究室主催）, 発表年月日：2013 年 3 月 3 日, 発表場所：東京大学（東京都・文京区）
（８）発表者名：井上暁子、発表題目：「境界認識と自己意識——ドイツ在住ポーランド人作家と地域の関係を通して」、学会名等：地域研究コンソーシアム次世代ワークショップ「地域の〈対外的境界〉と〈内なる境界〉——東欧と中国語圏をめぐる研究者の対話」（企画責任者：香坂直樹）、発表年月日：2013 年 1 月 12 日、発表場所：東京外国語大学（東京都・府中市）
（９）発表者名：井上暁子、発表題目：「地域の放浪、定位の旅——移動する作家ヤヌシュ・ルドニツキの文学における「場所性」」、学会名等：日本西スラヴ学研究会、発表年月日：2012 年 3 月 30 日、発表場所：北海道大学スラブ研究センター（北海道・札幌市）
（１０）発表者名：井上暁子、発表題目：「地球外生物にとっての故郷——ポーランド人作家ダリウシュ・ムッシェルによるドイツ語文学」、学会名など：比較文学会北海道大会（ワークショップ「移民文学の比較研究—ホームとホームランドの狭間で」）、発表年月日：2011 年 11 月 5 日、発表場所：北海道大学（北海道・札幌市）
（１１）発表者名：井上暁子、発表題目：「ドイツ／ポーランドの狭間で——20 世紀越境文学の知られざる風景」（講演）、学会名など：2011 年度フォーラム・ポーランド会議『ポーランドとその隣人たち』（シリーズ第一回）、発表年月日：2011 年 12 月 10 日、発表場所：駐日ポーランド共和国大使館多目的ホール（東京都・目黒区）
（１２）発表者名：Satoko Inoue, 発表題目："Case Study of Myth Recycling in Polish Literature—*Klub Polskich Nieudaczników* in Berlin", 学会名等：Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies, 発表年月日：2011 年 11 月 19 日, 発表場所：アメリカ・ワシントン DC

〔図書〕（計３件）
（１）【共著】井上暁子「想起される地域—現代ポーランド文学における国境地帯の表象」、出版社名：山川出版社、書名：『東欧地域研究の現在』（柴宜弘・木村真・奥彩子編）、発行年：2012 年、83-99 頁
（２）【共著】井上暁子「わたしの語り、わたしたちの語り—ドイツ連邦共和国において 1980 年代に書かれたポーランド語文学を通して」、出版社名：風媒社、書名：『反響する文学』（土屋勝彦編）、発行年：2011 年、178-210 頁
（３）【共著】Satoko Inoue, “Beyond the First-person Narrative: Polish literature written in the Federal Republic of Germany in the 1980s”, 出版社名：Peter Lang GmbH (Frankfurt/M), 書名：*Contemporary Polish Migrant Culture in Germany, Ireland and the UK* (Joanna Rostek and Dirk Uffelmann eds.), 発行年：2011 年, pp.63-79

〔その他〕
ホームページ等
（１）『日本ロシア文学会関東支部報』No.32, (2014 年 10 月)
http://yaar.jpn.org/varia/sibuho/kanto/32_2014.pdf
（２）ポーランド学術アカデミーベルリン歴史研究所
http://www.cbh.pan.pl/index.php?option=com_content&view=article&id=331%3Aseminarium-klaus-zernack-colloquium-17032014&catid=27%3Aarchiwum-terminow&Itemid=102&lang=de

６．研究組織
（１）研究代表者
井上暁子（Inoue Satoko）
熊本大学・文学部・准教授
研究者番号：20599469